国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

マクロコズム '97.11

◎特 集　日本と韓国の相互理解と
友好増進のための交流

vol. 19

㈶青少年国際交流推進センター

特　集

日本と韓国の相互理解と友好増進のための交流

▲ 韓国訪問団とホストファミリー及び受入実行委員（福岡）

▼ 韓国からのパネラー２名を交えての公開セミナー（東京会場）

朴団長と固い握手を交わす
▼ 日本青年国際交流機構大森会長

歴史的にも文化的にも関係の深い日本と韓国が友好関係を増進させていくことは、両国のためのみならずアジア太平洋地域の発展のために不可欠です。しかし、両国の関係は、経済面での結びつきは強まりつつあるものの、国民感情の面では、「近くて遠い国」という言葉に表われているように、相互理解と友好親善を増進していくためにより一層の努力が必要な状況にあるのも事実です。

本事業は、平成７年の日韓国交正常化30周年を踏まえ、同じ問題意識を有する㈳韓国青少年交流振興協会と連携し、21世紀に向け、両国の将来を担う青年たちの相互理解と友好親善の促進を図るものとして実施しています。セミナーを含めてのプログラムは、今回は２回目となります。実施にあたっては、日本財団より補助事業としてご協力をいただきました。

〔内容〕 青少年の育成に積極的に取り組んでおり、かつ、日韓親善交流の推進に強い関心を有する韓国青少年指導者20名をわが国へ招へいする。

期　間：平成９年７月25日（金）～８月３日（日）10日間

場　所：東京及び福岡

◀ 総務庁青少年対策本部久山次長に表敬訪問
久山次長は勉強中のハングルで迎えてくれました

表敬訪問で
各方面にアピール

福岡県中村副知事に表敬訪問 ▶

▲ 在福岡大韓民国総領事館に朴団長及び副団長２名と日本青年国際交流機構酒井副会長及び福岡県青年国際交流機構安達会長が表敬訪問

福岡のセミナー会場でも活発な質疑が
▼ なされました

▲ まず、身を清めてお参りを

▲ 八女伝統工芸館にて手すき和紙作りの体験
「う～ん、なかなか難しいネ」

最も楽しい一時、人々とのふれあい

◀ ホストファミリーとのマッチング
初めて出会った人々が、直ぐに溶け込んで

あっという間のホームステイ２泊３日でした
▼ 最高の思い出に

◀ 再会を誓って、別れの時
（福岡空港にて）

わずか10日間の日程ですが、セミナーを2回行う本プログラムは、意義深いものとして韓国側にとても好評です。

韓国との関係を語るとき、ともすれば避けたくなるような話題も、個人を知り合った中での意見交換は素直に互いの言葉を聞くことができます。相手の言葉の真意を理解できてこそ、こうしたセミナーの意味があるでしょう。ときに、認識の違いがあっても、互いに近づきたいと思う心が距離を縮めてくれる事でしょう。

今回のセミナーで韓国側パネラーの一人であった韓さんの発表要旨を掲載します。皆さんは、彼の発表をどのように感じますか。少し時間をさいて、この内容を読みながら韓国との関係を考えてみませんか。

日本と韓国の相互理解のために

㈳韓国青少年交流振興協会会員
韓　奉　求

韓国と日本の相互理解のためにこのような交流会で私達を温かく歓迎して下さった関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

21世紀を目前にした今日、世界の各地域で急激な速度で発展を遂げています。

NAFTA, EUが形成されると必然的に極東地域を一つに結ぶ経済圏が構成される事が予想されますが、日韓の間には相互理解への差が大きいため互いに反日嫌韓という言葉も存在します。このような関係を見るように21世紀を目前にした今日、日本と韓国の相互理解はどう進めるべきなのかこの席を通じて考えて見たいと思います。

まず、不幸な過去の歴史のため韓国人から見て日本が遠い国であると感じさせないように歴史を正しく認識することです。一つの例として、日本のある閣僚は「日本は朝鮮統治は朝鮮の近代化に貢献した。」などの発言で韓国人の敏感な部分をどうして刺激するのかという問題です。歴史は真実の上に基づくべき問題であり、間違った過去があったら正直に認め、過ちがあった事を未来に繰

主な内容

日本と韓国の相互理解と友好増進のための交流 …… 5～7
第12回青年国際理解セミナー……8～10
「第7回世界青年の船」団長　松尾弐之
南アフリカ紀行 ……11～13
イラクの医療事情 …… 14～15
中部ブロック大会を終えて…… 16～17
クッキング・ザ・ワールド …… 18
岡山青年国際交流会 …… 19
福島全国大会のお知らせについて …… 20

〈表紙の説明〉
「第8回世界青年の船」
～上岡弘二団長　写真展～
"青春群像 '96"の作品より

り返さないという知性的な力がバックグラウンドになければ発展した関係になれません。誰でも知っている事実を隠し、言語の修辞的な表現を借りてしきりに逃げ抜けようとする日本の閣僚達の発言は、両国の国民の感情を刺激すること以外に少しの意味もありません。

二番目に未来のために教育を正しく行うべきです。過去の歴史は事実のまま教え、未来に同じような歴史が繰り返されてはいけないということを強調しなければなりません。日本の原田教授の「歴史教科書の諸問題」という論文で「文部省の教科書検定は侵略戦争や植民地支配の実態を明かにするのを極力避けようとし、歴史教科書の記述を制約、歪曲している」と述べています。このように良識のある知識人が多いと思います。そして、韓国のカトリック指導者であるキムスウファン枢機卿は「日本は世界で一番礼儀正しく親切な人達だと思います。しかし、国家としての日本と言えば経済大国としての強力なイメージはあるが“礼儀正しく親切な日本”とは尋常なことでは言えません。特に、日本より遅れていると思われる国々に対する態度では、時々過去の軍国時代を思い出すこともあります。私は、日本人の親切できれいな心と国家としてのその反対の態度との差をどのように理解すればよいのかわかりません。」
キム枢機卿は、私たちの親の世代であり、現代の世代である私、私が教えている青少年、この三代を見るとき、まだ両国の国民の間には「近くて遠い国」という認識を捨てきれないのが実情です。

このようになった原因は他には考えられません。隠し歪曲しようとしても隠しきれない、忘れられない「過去」が両国の国民の心を引き離しているからです。未来は自由に作ることができるが、過

去はだれも変えることはできません。

しかし、両国の間になくすことも、忘れることもできない歴史があるという事実だけで、今日のように近くて遠い関係に止まっている理由にはなりません。不幸な過去があったことに関わらず、このようなことを克服した国々があります。支配された世代、現在の既成世代、未来を担う青少年世代の三代共存している両国の関係で、相互理解のために解決しなければならないことが、前述の二つです。そのようになれば、春雪が溶けるように互いに心が開けると思います。

三番目に、これらに基づいて新しく迎える21世紀を開いて行く青少年が、健全に成長するような基盤を備えておかなければなりません。日韓両国の大衆的な芸術、マスメディア、児童・青少年文化、両国の生活文化、国民の意識等をより積極的な交流を通じて討議し、両国が共通的に抱える問題を解決し、より良い目標を認識して、21世紀へ共に歩むべきだと思います。日本に来て、様々なものを見て、習い感じたことを、韓国の青少年に最も客観的な立場で伝え、また教えて相互理解に役に立つよう努力しようと思います。

ありがとうございました。

〈福岡のホストファミリーの方より〉

韓国の女子大生に教えられたこと

池田　義昭

今回、韓国女子大学生のホームステイを通じて、私たち家族（夫婦と娘27歳）も、大変よい勉強になりました。そして、彼女との対話によって、隣国、韓国という国や国民に対して、親近感をおぼえ、今度の交流はとても意義深いものがあったと思いました。

任熙淑（22歳、女子大学生）とは、僅か3日間の交流ではありましたが、お互いにいろいろ感じ合うものがあったと信じています。彼女は、高校時代に、日本のひらがなを習い、大学に入ってからも、国際交流センターで日本語の会話を勉強したそうです。私はその熱心な学習意欲には感心させられました。今回の日本訪問で、彼女の語学に一段と磨きがかかったことと思います。

大学を卒業したら、貿易会社に就職したいと、将来計画を立て、今、そのために一生懸命勉強していると聞き、敬服しました。きっと、彼女は、自分の目指す企業に入社し、立派な社会人になってくれるだろうと期待しています。

そして、又、今回のホームステイで、私たち親子が彼女に教えられることがありました。それは、家族の在り方についてのことであります。第1日目の夕食のとき、父親である私が、箸を取って食べはじめてから、他の者が箸をつけることです。家内と娘は、彼女の説明があるまで、その意味が分からず、なぜ、彼女が料理を食べはじめないのか、不思議な顔をしていたというわけです。

儒教の精神が、日本以上に、韓国人の風習に残っていることに、今さらながら反省させられた次第です。そして、又、父親に「おやすみなさい」の挨拶をしてから、就寝することにも、重ねて教えられるものを感じました。

今どき、儒教の心など、ナンセンスだと思う人もあるかも分かりませんが、親を大切にし、そして、一家の大黒柱である父親を中心としていくことは、家庭生活での見本であることは当然のことです。

私たち、今の日本人が見失っている何ものかを、若い韓国青年との交流によって、教えられたと痛感しています。

◀ ホストファミリーとのマッチング会場にて

アメリカの世紀の終わりの始まり(II)

～近代社会の終焉の先にあるもの～

上智大学教授
松尾　弋之
(「第7回世界青年の船」団長)

ケネディの「ニュー・フロンティア」

アメリカではどうなったかといいますと、1953年から自由主義を掲げたアイゼンハワー大統領政権が8年間続きますが、ニュー・ディール時代に生まれた老人のための社会福祉制度や累進課税制度を廃止するわけにはいかず、完全に自由経済に戻すことができませんでした。アメリカは混合経済、修正資本主義時代に入っていたのです。

そしてケネディ大統領の登場です。1961年に大統領に就任したケネディはニュー・ディーラーでしたが、下院の長老的存在であり、副大統領に就任したジョンソンこそ徹底的なニュー・ディーラーでした。彼は、ルーズベルトの政策に心を動かされ、政界入りを果たした人物なのです。ケネディ・ジョンソンのコンビは、世界の共産勢力と対立しなければならない困難な時代に、ニュー・フロンティア主義を掲げ、ルーズベルトの政策にならった政治を展開します。フランクリン・ルーズベルトは、失業者をかりたてて、高速道路の整備、国内の治山、治水を行いました。これを真似てケネディは、平和部隊を編成し、アメリカ国内だけでなく、世界中で困った人達を助けることも行いました。これは、若者の理想主義に依存していましたが、あっというまに世界に広がりました。

その他にもケネディは国内的に様々な改革を続けました。ケネディがダラスで暗殺された後、生粋のニュー・ディーラーのジョンソン大統領は「WE SHALL CONTINUE」というスローガンを掲げ、「史上最大の偉大な国家が、貧困問題や人種問題に対抗できないわけはない」と大きな国家の権力を利用し、貧困対策を展開しました。アパラチア山脈の貧困層に職業訓練を行ったり、貧しい人達に優先的に職を与えたり、黒人優遇政策を始め、ついには、公民権法を通過させました。巨大な連邦政府の力によって、貧困対策事業や社会正義をなし遂げようという発想です。私は、このような時代は、ケネディ・ジョンソン時代がピークであったのであり、流れは変わりつつあったのだということを申し上げたいのです。

「ザ・ベスト・アンド・ブライテスト」の限界

2人のルーズベルトとケネディ政権時代には「ブレイン・トラスト」と呼ばれる「頭のいい人達」が集められ、社会改革、計画経済、フィニッシュングラインの平等をなし遂げていました。フランクリン・ルーズベルト政権の時はコロンビア大学の学者が、ケネディ大統領の時代には彼の母校であるハーバード大学の先生が中心だったのです。ハーバードの有名な日本史の先生であったラ

イシャワーは日本大使に、経済学のガルブレイス先生はインド大使になったのです。この「頭がいい」と言われる人達が政策の重要な部分を担当するというのは、20世紀始まって以来のアメリカの伝統なのです。

ノーベル賞学者のロストウは、ケネディ政権の中枢を占め、ベトナム戦争を立案します。しかし、ベトナム戦争は失敗し、アメリカの敗戦で終わります。実はこのとき、ほころびが出てきつつあったということを言いたいのです。いわゆる「ザ・ベスト・アンド・ブライテスト」によって、アメリカの進歩的政策と民主主義はうまくいっているように見えたが、実はそうではなかったのです。

「つまずき」の始まり

例えば、ロストウはベトナム戦争当時、「戦略村構想」を打ち出しましたが、ベトコンは排除できませんでした。ベトナムの村落の人々は白昼、南ベトナムとアメリカ軍が入ってくると、民主主義、自由主義を支持する態度を取る。しかし、夜になってベトコンが入ってきて、説得されると、翌朝には、ベトコンの村になる。その繰り返しを見たロストウは、「草と木で出来た家だから、ベトコンが夜中に忍び入るのだ」とブルドーザーを村に入れて家々を潰して、5階建てのコンクリートの頑丈な家を建てます。そこに人間が住めば、豊かで近代的な生活が送れ、ベトコン化しないだろうと考えたのです。しかし、ベトコンはそのアパートの5階に出現するのです。

同じころ、ジョンソンは、アメリカ国内で「スラム除去」政策を開始しました。黒人などが住んでいる汚い街では、ドラッグのやりとり、犯罪、売春、殺人など様々なことが行われるので、ブルドーザーで家を壊し、連邦政府の資金で、近代高層アパートを建てるという構想でした。実際実行に移されました。ところが、近代的で衛生的な生活を提供すれば、スラムが無くなるかといえばそうではなかったのです。当時のニューヨークタイムズは「高層ビルの33階の物陰に売春婦が立っている。13階にはドラッグ・ディーラーがいる。殺人も起こる」と伝えています。つまり、横のスラムが縦になっただけだというのです。

ジョンソン政権時代に、「頭がいい人」を集めて中央政府の膨大な資金を使って「民衆の幸せ」のための政策を企画、立案すること自体が不可能になってきたのではないか、という認識がアメリカに広まってきた。これが、今朝、私が皆様にぶつけたい一つの大きなテーマです。

「対抗文化」としてのヒッピー

その最大の例がベトナム戦争での敗北でしたが、国内的にもスラム対策が一向にうまくいかなかったり、白人と黒人の人種問題が改善されないなど、「進歩的合理思想」の限界が見え始めたのです。このような社会、経済、文化の流れを見た60年代の若者たちは、疑問を抱きました。「大学の先生の言うことは信じられない」と「学問の権威」に対する若者の反発が始まりました。いわゆる「学園紛争」ですね。さらに「30代以上の大人のいうことを信じるな」「学校の言うことも、教会の言うことも信じるな」と言い出します。「本だって正しいことを伝えているとは限らない。読書をやめよう」というのです。当時、日本の寺山修二も「書を捨てて街に出よう」といい、若者が走り

ましたね。アメリカでも当時同じ主張をしました。肉体の復権、「いままで、あまりにも、頭脳中心の世界に生きてしまった。肉体にも発言権を与えよう」と言われました。アメリカでは伝統的に、「体は衛生的に保とう」と教えられてきましたが、それにも反発しました。髪の毛の長いヒッピーの出現ですね。ヒッピーは単なる風俗ではなくて、若者によるアンチテーゼ、つまり対抗文化の提言です。

対抗文化こそは、実は、20世紀以来アメリカが政治の理念としてきたものの考え方、進歩主義、科学的技術、合理的発想、大きな政府、などの一連の思想を、全て否定する発想なのです。「巨大な科学技術」を疑うことは60年代に始まったのです。当時のカルフォルニア州知事ジェリー・ブラウンは「巨大な技術」を否定し「適正技術」を唱えました。井戸を掘ったり、風車による発電を試みたりしました。そして「適正技術局」までカルフォルニア州に設置してしまうのです。

いままでのアメリカのやり方に対する反逆が起こる。こうした騒然とした雰囲気の中で、黒人は「いままで必死になって白人の真似をしてきたけれども、黒人は黒人のままで十分美しいのだ」という認識を持つようになります。女性もまた、様々なニュアンスを持った女性解放運動を展開します。黒人の動きに触発されたネイティブ・インディアンはレッドパワーと称し、「自分たちこそが、固有の文化を持っていたのだ」と発言します。つまり、社会がばらけてきたのです。いわゆる「脱構築」の時代です。アメリカは一つではないということです。

「メルティングポット」から「サラダボウル」へ

それまで「アメリカはメルティングポット」であるという論議が盛んでした。「アメリカはいろんな人種が集まってきて、協力して、アメリカ文明のもとで一つのるつぼのように溶け合うのだ」と言われていました。しかし、実態はそうではなかった。そこで「アメリカサラダボウル」論が社会の主流を占めるようになります。つまり、キュウリとトマトとナスビは決して溶け合うことがない。キュウリはキュウリとしてのアイデンティティを持ったまま、ナスビと共存しているにすぎないのだという理論が、世の主流になりました。いわゆる統合された「アメリカ」は60年代に崩壊したといわざるを得ない。アメリカは「サラダボウル」、つまり、ナスビはナスビ、黒人は黒人であることに誇りを持つという社会が出現してきました。「多元主義」という風に呼ばれているものです。社会が分断され、ばらけてきていたのです。

やはりアメリカは先進国でした。20世紀のアメリカが60年代に崩壊したとすると、それから30年後の1992年に、同じことがユーラシア大陸でも起こります。「ベラルーシは何でベラルーシで悪いのか」、「ウクライナはウクライナで独特の文化ではないか」という事件ですね。しかし、ソ連邦の崩壊が起こる30年も前に、アメリカで同じことが起こっていた。その結果、どうなったかというと、例えば、黒人がある条件で殺人を起こした場合、黒人の陪審員はそれは殺人ではないと言う。同じ事件を白人の陪審員にかけてみると有罪であるという、そういう時代がやってきたのです。黒人と白人、それだけではなく、ウクライナ

人と日系人とアメリカインディアンでは正義が違う、おそらく「真善美」がみんな違うのでしょう。そういう時代が既にアメリカではやってきているといえる。シンプソン事件を見ていると「あんなことはおかしい」と思うけれど、「ばらけてしまった」という観点からみると、この姿は実によく理解できるだろうと思います。これは私が勝手につくりあげたお話ではありません。　（つづく）

南アフリカ紀行

アパルトヘイトから虹の国へ

第9回「東南アジア青年の船」参加青年
第23回「東南アジア青年の船」ナショナルリーダー
中村　恵

関西国際空港を出てから約18時間、バンコクでの給油を経てようやくヨハネスブルグに着いたのは8月25日。南アフリカは早春を迎えていた。

過去350年にわたり、少数派の白人がこの国を支配。60年代以降は、公然とアパルトヘイト（人種隔離政策）が実施された。

アッテンボロー監督の映画「遠い夜明け」(Cry Freedom)が発表されたのは、確か10年ほど前だ。今から20年前に、治安当局に逮捕され、拷問の末に虐殺された黒人、スティーブ・ビーコが描かれていた。享年30歳。同じ頃、ヨハネスブルグの中心から南西方向に位置するソウェトでは、黒人の生徒たちが蜂起し、600人近くが殺された。日本でいえば明治維新か。青年達の血が新しい時代へと注がれた。

1994年4月、ついに全人種参加の総選挙が行われ、ネルソン・マンデラが史上初の黒人大統領に就任した。今、南アフリカでは新たな国造りが始まっている。

▼ クルーガー国立公園にて　白サイとともに（筆者）

▼ ケープ半島のペンギン専用ビーチ

▲ WDB 全員が営む雑貨店

WDB の活動

そこで、私が個人的に参加したこのツアーの目的のひとつは、地元の NGO である女性開発銀行（WDB）の活動を視察することだった。

制度としての人種差別はなくなっても、なお貧富の差は大きい。WDB は、おもに黒人が住んでいる貧しい地域でも特に不利な立場にある女性が、学び、融資を受け、自力で生計をたてられるような仕組みを提供している。

各地域で、会員は相互扶助的な 5 人グループを作り、8 グループでひとつのクラブを設立する。各クラブを WDB の担当官が訪問し、研修や会合を行う。会員が最初に借りられる金額は約 8,000 円。その資金で布を仕入れて洋裁を始めたり、雑貨店を営んだりしていた。

会員の店舗を訪問した時、男たちは昼間からビールを飲んでだらだらしていた。南アフリカで頼りになるのは、男より女とのことだ。

私たちが訪問したある村には水道ができたばかり。電気はまだだった。会員の女たちは陽気で、見るからにたくましい。自然と歌いだし、踊りだす。たくさんの子供たちも集まってきた。その歌声の波は、その場にいる人々すべてを巻き込んで、どんどん大きくなっていった。すべてとつながっている、あるがままの生命力を感じた。

この旅には、まさにそんなパワーを感じさせてくれる場面が散りばめられていた。なにしろ南アフリカは、動物や植物の宝庫でもあるのだから。

自然の中で

国営の動物保護区だけでも 10 か所以上。中でもモザンビークとの国境沿いにあるクルーガー国立公園は四国に相当する大きさだ。大きすぎて、お望みの動物にはなかなか会えないとか。私たちは運が良かった。ビッグ・ファイブと呼ばれるサイ、バッファロー、象、ライオン、ヒョウに次々遭遇。これには地元のガイド兼ドライバーさんも驚喜してしまった。

8 月 30 日、ケープタウンに飛び、その翌日、バスでひたすら北上した。目指すはナマクアランド。枯れ果てていた大地が、8 月から 9 月にかけて、花園に変身する。いちめんの野の花、いちめんの野の花、いちめんの野の花……。もしかしたら、あの世に通じているお花畑ってこんな感じかもしれない。

夜になると、いつも空を見上げた。どこにいても、まず南十字星が目に飛び込んでくる。そして天高くさそり座が見えてくる。大西洋を望む海岸で空を見上げると、降るような星空に、天の川が大きく弧を描いていた。海には、金星へと続く光の道ができていた。

9月5日、ケープ半島をバスで南下し、喜望峰に至った。右に大西洋、左にインド洋が見渡せる。とはいっても、青い海はどこまでもつながっている。くじらが水しぶきをあげて、その姿を現した。

この半島には、ペンギンが生息する小さなビーチもある。そこには、誰に頼まれたわけでもないのにペンギン守を続けているおじさんがいた。この浜のペンギンのことなら何でも知ってるよ、と優しい目で語ってくれた。

▲「星の王子さま」にも登場するバオバブの大木 大人6、7人で手をつないでやっと囲める程太い

「虹の国」へ

この日の夕方、ケープタウンの市長舎前に市民は大集合し、2004年のオリンピック開催地の発表を待っていた。そこに向かって歩いていた私たちは、人々が帰り始めたことに気付いた。アテネに決まったとのこと。がっかり。

その後は、道にあふれた人の流れに押されて、少し恐いほどだった。ようやく路線バスに乗り込んだ。その時、この町の青年たちは優しかった。さっと、この日本人グループに席をゆずってくれたのだ。

翌日、私たちは2週間の旅を締めくくった。

国土面積は日本の3倍。そこにアフリカ大陸の先住民族、オランダやイギリスから来た白人、インドやマレー半島から来た人々、様々な混血など、多民族で構成された約4,200万人が住んでいる。しかし南アフリカは今、そんな違いを乗り越えようとしている。マンデラ大統領はその就任演説で、「虹の国」を建設しようと国民に呼びかけたという。

この旅の途中、雨上がりの空に本物の虹が現れた。見事なアーチを描き、この国の心意気が伝わってくるようだった。

▼ 小学校の敷地内で行われたWDB会員のクラブ、定例会。素晴らしいコーラスと静かな祈りで始まる

イラクの医療事情

――経済封鎖下の苦しみの中で――

静岡県青年国際交流機構
難波江功二
（「第6回世界青年の船」参加青年）

医学部最後の夏ぐらい日本に残って勉強しようと思っていたら、「イラクに調査に行かないか」と友達から誘われた。

ご存知の方も多いと思うが、イラクは1990年のクウェート侵攻以降、7年に及ぶ国連による経済封鎖を受けている。これによりイラク国民は窮乏に貧し、医療状況は最悪であり、医学生はまともに勉強できていないので支援に行こう、というわけである。

結局私はこの話に乗り、「日本イラク医学生会議」という団体を友人と設立し、全国の医学生6人でイラクを訪れることになった。この団体の目的は主に三つある。医学書100冊と医薬品等を贈呈しイラクの現状改善に少しでも貢献すること、バクダット大学医学部学生と交流すること、そして、経済封鎖下のイラクの現状について調査を行い、その広報活動をすること。

イラクでは病院を中心に活動を行った。小児病院においてまず目に飛び込んでくるのが、多くの痩せこけた栄養不良の子供たちである。蛋白不足ならびに寄生虫感染が原因でそのようになっているのだが、病院に来ても栄養剤がないため、ただ補液をするのみである。さらに蛋白不足は子供たちの免疫力を低下させ感染症を引き起こすが、抗生物質がないので治療しようがない。実際私の目の前で、数名の子供が栄養不良のため死んでいった。機材不足も深刻で、医療機器は戦争前のものがあるのみで、壊れてしまえば部品が手に入らず使えないし、麻酔もないのでオペもできない。

また、発電所や浄水場は戦争で破壊された後修復されていないので、安全な水が手に入らず多くの人は慢性の下痢で苦しんでいる。実際あらゆるデータにおいても、保健状況の激悪化は明確になっている。

一方、医師のレベルは非常に高いのだが、彼らは物資不足による無力感にあえいでいる。一人の小児科医が「戦争前、私はUNICEFで途上国のために働きたいと考えていたが、まさか自国がこのような状況になるとは……」と述べていたのが印象的であった。

なぜこのようになったのであろうか。確かにイラクより貧しく、医療状況が劣悪な国は世界の中には多く見られる。しかし、医療レベルというものはその国の経済力、教育水準、文化などさまざまなものを反映しており、一概に比較できるものではない。もともとこの国は産油国であり、経済封鎖前は非常に豊かで、高い教育水準を誇った。それが、国土を破壊された直後の経済封鎖により、このような状況がもたらされたのだ。これは明らかに人災である。

私は、ここで皆さんの感情にイラクの犯した罪の正当性を訴えるつもりはさらさらない。しかし、この「経済封鎖」という、国際社会が今後も使っていくであろう制裁手段の有効性について考えていただきたいと望んでいる。

最後に「経済封鎖」に対する持論を展開させていただきたい。今回の経済封鎖は湾岸戦争に対するペナルティとして始まったが、その後も核査察拒否などを理由に続けられている。おそらく国際社会の根底にフセイン政権打倒のもくろみがあり、それを国民に実行させようとしているのであろう。

私の経験からは、イラクに関してはこの手段が有効かつ適切であるとは思えなかった。まず、表面的ではあるが、私が出会ったイラク人で現政権に対する怒りや抑圧を感じている者は皆無であり、逆にアメリカを中心とする国際社会に対する反発は確実に高まっている。さらに、1,900億ドルの負債を抱えるイラクへの経済封鎖は、ペナルティとしては十分すぎるものであり、それはただ弱者を苦しめる構造を作り出してるとしか思えない。

戦前の日本がアメリカの経済制裁により第二次世界大戦に突入したように、この手法によって先進諸国が想像するような結果をもたらす程、世界は単純ではないということを我々は認識すべきである。

◀ 栄養不良に白血病が重なった女の子
2日後に死亡

中部ブロック大会を終えて

静岡県青年国際交流機構
國分　由佳

8月2・3日、静岡県浜松市にて中部4県の会員60人（一般含む）が集まり、中部ブロック大会が開催された。

静岡IYEOでは、例年にない凝ったプログラムを企画。受け身になりがちな講演会をやめて参加者も一体となって考えるシミュレーションゲームや、夜は野外映画を行った。

静岡県は新幹線駅を六つも持つ、横に長い県。従って会員も県下各地に散らばっており、電子メールで連絡をとりあった。大会前日午後10時に初めて実行委員全員の顔合わせ。それから、貿易ゲームの準備にかかった。

この「貿易ゲーム」参加者は六つの国にわかれ、各国ごと与えられたもの（紙、定規、はさみ等）を使って製品や野菜を作り銀行で換金することで多くのお金を稼ぐことが目的。資源・道具をうまく調達しないと時間が過ぎていくばかり。隣国との交渉も重要。時にはインフレがおこり、バランスのとれた需要と供給の大切さを身を持って体験できる。つまり、「限りある資源をどのように生かして物を作るか」という実践を踏まえ、資源の価値観を問うものだ。

それに、今回は静岡ヴァージョンとして、農業国を追加して農作物も換金する対象とし、また途中神様の登場により、神の見えざる手をもって混乱を招く（資源の発見、留学生の派遣、干ばつ等）という、オリジナルを取り入れた。

▲ 貿易ゲーム会場にて

いざ始まってみると、初めは戸惑いを見せていた参加者も、内容を把握するにつれ次第に白熱していき、会場内は熱気でムンムンしていた。インフレが突然おこると会場はドッと沸き、銀行を担当する実行委員も作戦成功になんともいえない笑み？が生まれた。また、実行委員の予想外の行動をとる国もあり、人材派遣、物の貸し借り等盛んに行われ、参加者の知恵に驚かされた。

中盤にさしかかったところで、神様の登場。これは㈶青少年国際交流推進センターから出席いただいた、久世総務部長が演じて下さった。なかなかの演技力。振り回すサイコロに参加者全員の目が集中した。

日頃途上国について考えることはあっても、それは同情の気持ちを持つだけでその国の実状まではわからないものだ。今回参加者より、「物があっ

てもそれを製品化する手段やお金がないとつらいということが実感できた。」との感想をもらい、ゲームを通して貴重な体験を提供でき、本当によかったと思う。

そして、簡単な懇談会の後、会場近くの小学校を借り、地域の皆さんへの還元も考え「野外映画」を行った。真夏の真っ昼間、暑い最中にスクリーンをはる建設用足場を3段組んだ。午後6時を過ぎるとビニールシートを持った親子連れが続々と集まってきた。

まずはネパールの琵琶「シタール」の演奏。涼しげで異国情緒あふれる音にみなボーっとしてしまった。遠くヒマラヤのパノラマが目に浮かんでくる。珍しい楽器に触れようと、演奏が終わってからも奏者の所へ行き話を聞いたり、今度はいつ静岡に来るかを訊ねる人もいた。

そして、子供たちお待ちかねのディズニー映画「トイストーリー」。3.4m×6.8mの大型スクリーンに等身大で動くアンディ、ウッディ（映画の主人公）に子供たちは釘付けだった。

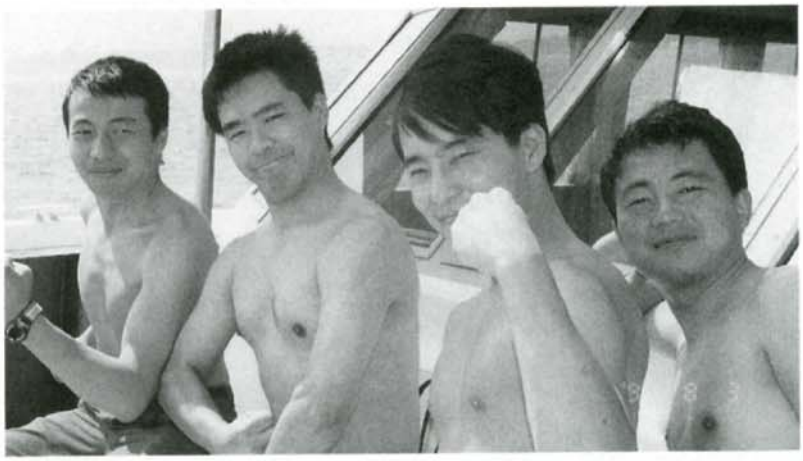
350人から400人近い人が集まり、大盛況だった。親子でござの上で小学校校庭で野外映画を見る。なんともほのぼのとしたよい雰囲気だった。この子供たちが大きくなった時、「そういえば、この楽器どこかでみたことがある」とか「昔、野外映画見たなー」といつか思い出してくれるとうれしい。

翌日のオプショナルツアーは、まず、浜松駅近くの複合施設「アクトシティ」見学。中にはオフィスビル、ショッピングセンター、展示ホール、音楽ホール等がある。今回は静岡IYEO会員の特別な計らいで浜松市が誇る音楽ホール、楽屋などを見学。

そして、楽器博物館へ。ここでは、世界中から集められた楽器を展示するだけでなく、視聴することも出来る。中には試しに自分で音を出すことが出来る楽器もあり、みんな好奇心旺盛。「この楽器はどうやって音をだすの？」「どんな音？」とほとんどの人が「もう少しいたい…！」と声をあげていた。

そして、ドライブを楽しみながら浜名湖へ。クルージングはお天気にも恵まれ、気分爽快。みんなあまり話をしないでおとなしく船に乗っていると思えば、世界船やアマゾンや韓国といった、各自思い出の「船の旅」の余韻にひたっていた。

音楽の街「浜松」、近郊の自然「浜名湖」をアピールするよいプログラムだったと思っている。



◀ 浜名湖クルージング

COOKING THE WORLD（クッキング・ザ・ワールド）

岡山青年国際交流会副会長　村木実由紀

岡山青年国際交流会の交流イベント「クッキング・ザ・ワールド」は、外国青年を講師に招き、各国の料理を共に作り、その国の話を聞いたり、言葉を学ぶプログラムでした。今までは、当会会員による会員の為のイベント色が強かったのですが、今年になってその型枠が会員のアイデアによって除々に変化していったのです。

変化のきっかけとなった出来事は、岡山県の青年海外派遣事業の中止が決定されたことでした。毎年、県派遣事業によって20名以上の新鮮なパワーを得ていた当会にとって、中止の決定はなんといっても精神的に大きなダメージでした。これからの当会の在り方を考え、会の趣旨に賛同してくれる一般会員の獲得に繋がるイベントの展開を進めていったのです。

初めての参加者でも溶け込みやすい「クッキング・ザ・ワールド'97」は、岡山青年国際交流会の説明なども含めたプログラムで、台湾料理編・インド料理編・日本料理編・トルコ料理編・インドネシア料理編の5回を県内各地で開催しました。今回は、以下に、日本人だけでなく、外国青年に好評だった日本料理編をご紹介します。

日本の夏を満喫しようよ　～日本料理編　IN　矢掛町～

日　　時：平成9年8月10日（日）　10：00～15：00
場　　所：水車の里　フルーツトピア
　　（岡山県小田郡矢掛町）
主　　催：岡山青年国際交流会　企画部
担　　当：武　康弘（岡山青年国際交流会理事
　　「第10回世界青年の船」予定団員）
協　　力：武一家・矢掛町婦人会の方々
　　矢掛高校本陣太鼓チームのみなさん
メニュー：流しそうめん・岩魚（やまめ）の串刺し
　　炭火焼き・手巻きずし・漬物・すいか
参 加 者：外国青年10名　会員10名　一般16名

緑の美しい矢掛町。そこでとれた自然の幸。私たちの暑い一日が始まりました。そうめんを流す竹は約10メートルの超豪華版。つゆをいれる器も手作りの竹製です。近くの川でとれた岩魚を刺す串も手作り。ギンギンと照りつける太陽もへっちゃらな元気者の参加者たち。みんなで作ってみんなで食べる。食べる。食べる……。

矢掛高校本陣太鼓チームのみなさんによる伝統芸能「本陣太鼓」の披露もあり、外国青年の歌も飛び出し、笑い声の絶えない楽しい一日でした。この日をきっかけに、新しくメンバーになった人、友達になった人、矢掛町で生まれた友情の芽は一人一人の心の中で大切にはぐくまれ、すくすくと育っています。

全国大会をこんな企画に変身させてしまった岡山青年国際交流会。福島へ集合！

IYEAO 岡山青年国際交流会 IYEAO

PRESENTS

国内スタディツアー　IN　みやぎ・ふくしま
仙台・松島＆福島・会津、自然の色を見つける旅

① 日本青年国際交流機構の全国大会に参加し、おおいに、刺激をうける。
（みんなで全国大会に参加し、岡山青年国際交流会をアピールしましょう。）

② 宮城青年国際交流機構・船と翼の会ふくしまなどのメンバーと交流し、おおいに、友情を深める。（交流機構の醍醐味は何処に行っても、メンバーがいる安心感）

③ 東北の美しい自然の色を満喫する。
（紅葉、雪景色どちらが見えるかな）

④ 温泉にのんびりと浸かり、リフレッシュする。
（秋保温泉・飯坂温泉など温泉好きにはたまらない名湯がいっぱい。）

⑤ 牛舌、牡蠣などグルメる。

⑥ （もちろんおいしい地酒もあなたを待ってます。）

⑦ 上記以外にもあなただけのスペシャルなテーマを見つけてください。

記

●日　　程：平成9年11月28日（金）～11月30日（日）2泊3日
●定　　員：先着　10名
●行　　程

11月28日　岡山＝大阪＝仙台　秋保温泉、仙台市内観光など
宮城青年国際交流機構のメンバーとの交流会（宿泊　仙台市内）

11月29日　飯坂温泉　福島市内観光など
日本青年国際交流機構第13回全国大会参加　宿泊　J-VILLAGE（福島県楢葉町）

11月30日　日本青年国際国際交流機構第13回全国大会参加
いわき湯本温泉など　福島＝大坂＝岡山

●参　加　費：50,000円
●問い合わせ：企 画 部　村木実由紀　　TEL＆FAX　0866－94－4488　携帯　030－74－40685
●申　込　先：岡山県庁　青少年課（担当：中村）　TEL　086－224－2111　FAX　086－225－2949

青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第13回全国大会
第4回青少年国際交流全国フォーラム

うつくしま　ふくしま '97　～無限にひろがるコミュニケーション～

期　　日：平成9年11月29日（土）～30日（日）
会　　場：J-VILLAGE　〒976-06　福島県双葉郡楢葉町大字山田岡字美シ森8
TEL　0240－26－0111（代）　FAX　0240－26－0112
参 加 費：会　員　12,000円　小学生以下　9,000円（宿泊、懇親会、朝食を含む）
非宿泊　9,000円　セミナーのみ　500円
参加申込方法：マクロコズムNo.18に同封されていた振込用紙に必要事項を記入の上、参加費用をお振り込み下さい。又は、官製葉書に通信欄と同様の内容を記載の上、お申し込み下さい。
〔葉書による申込先〕　〒960　福島市黒岩字弥生46－4　日下部喜美子
TEL　0245－49－5662
参加費振込先：郵便振込　口座番号：02260－4－90235　口座名義：IYEO全国大会
＊問い合わせ先：事務局　岩橋香代子　TEL　0242－28－9745（FAX兼用）

編集後記

交流の秋本番。全国で受入れをして下さっている各IYEOの皆さん。大変ですが、楽しみながらがんばりましょう。

全国大会の福島県も皆さんがたくさん来て下さるのを楽しみにしています。誘い合わせて、いざ「うつくしま　ふくしま」へ!!

＊本誌の年間講読をご希望の方は、㈶青少年国際交流推進センターまで葉書又はＦＡＸにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム）　11月号　Vol.19　1997年11月1日発行（隔月発行）
編　集：マクロコズム編集委員会
発　行：財団法人　青少年国際交流推進センター
〒103 東京都中央区日本橋人形町2－35－14
TEL　03－3249－0767
FAX　03－3639－2436
e-mail LDP 04056 @niftyserve. or. jp
編集協力：総務庁青少年対策本部
日本青年国際交流機構
定　　価：198円（本体189円）
印 刷 所：株式会社　絢 文 社
TEL　03－3959－3960

「第9回世界青年の船」報告会

7月27日(日)、国立オリンピック記念青少年総合センターの国際会議室にて「第9回世界青年の船」報告会を開催しました。当日は、70名以上の「第9回世界青年の船」のメンバーによって、ビデオ上映・寸劇・ファッションショー等の盛り沢山の企画が行われ、一般からも多くの参加者を得ることができました。

◀ 各国の民族衣装に身をつつめば、あの感激が戻ってくる

▲ 様々な展示品は体験の多様さを思わせる

▲ 貴重な体験をできるだけ多く伝えたい

思い出の民族衣装を纏えば、あの船上に ▶
タイムスリップ

海外派遣青年のつどい（ブロック大会）

今年度のブロック大会も、各開催県の努力で多種多様な内容で開催されています。

近畿ブロック

（7月5日・6日　於：奈良県）

テーマ：青年国際交流　過去、現在、未来
足元から世界へ・世界から足元へ
今、地球市民として

◀「第9回世界青年の船」メンバーによる事業報告

中部ブロック

（8月2日・3日　於：静岡県）

特色は、夜の「野外映画とシタールの夕べ」の開催。
一般の方の参加を求めて、地域の交流プログラムの部分をつくりました。

静岡流貿易ゲーム（?）で国際社会を考える ▶

中国ブロック

（8月23日・24日　於：広島県）

テーマ：和　今、私が始める○○物語
～仲間づくり、ふるさとづくり、
自分づくり～

◀ さあ、どんな物語ができたのかな？